

「働く若者のボランティアキャンプ」

- 第1回 7月14日(土)～7月16日(月) 2泊3日
- 第2回 9月29日(土)～9月30日(日) 1泊2日
- 第3回 10月6日(土)～10月8日(月) 2泊3日
- 第4回 12月15日(土)～12月16日(日) 1泊2日
- 第5回 2月23日(土)～2月24日(日) 1泊2日



I 事業の背景(必要性)

「第8次勤労青少年福祉対策基本方針」(厚生労働省：2008.10)では、今日、青年の社会体験が少なく、集団活動に消極的であったり、集団活動そのものになじめない青少年の問題が指摘されているが、こうした青少年にとって、他人との共同生活を送りながら社会活動等へ参加することは、他人と交わりコミュニケーション能力を高めるなど、社会性の涵養に繋がるとされている。

また、勤労青少年が自由時間を活用し、ボランティア活動等の社会活動に参加することで、職場や社会の一員であることの自覚を深めるとしており、「子ども・若者ビジョン」(子ども・若者育成支援推進本部：2010.7)においても、若者の社会形成・社会参画支援のためにボランティア等の社会参画活動の推進を図ることを基本的な方向として示すなど、青少年がボランティア活動を行うことは、社会参画意欲を高める上で有用な方法といえよう。

そこで、中央交流の家では、勤労青年の社会参画意欲を高めるプログラム開発を目的に、本事業を実施した。

II 事業の概要

1. 趣旨

- (1) 共同生活・活動を通して同世代の仲間との絆を深め、コミュニケーション能力の向上を図る。
- (2) 独居老人宅や被災地でのボランティア活動を通して、青年が達成感や自己有用感を得て自信を持つとともに、「共助・公助」の意識や態度を培う。
- (3) 地域には、青年の社会活動への参加が必要とされていることに気付き、地域社会への参画意識を高める。

2. 参加者

(1) 対象・募集人数

ボランティア活動に関心のある働く若者 (20名)

(2) 参加状況

<第1回：被災地支援ボランティア～南三陸町～>

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	5	4	9	静岡県御殿場市・小山町・三島市・沼津市・富士市・富士宮市 伊豆の国市，神奈川県横浜市	小学校教員(2)，高校講師(1) 市役所社会教育課職員(1)
31歳以上	4	2	6		自衛隊員(3)，製造業(3)
合計	9	6	15		会社員(4)

<第3回：被災地支援ボランティア～南三陸町～>

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	4	2	6	静岡県三島市・沼津市・富士市・富士宮市・静岡市，神奈川県横浜市・平塚市，山口県防府市	小学校教員(4)，高校講師(3) 地方公務員(2)，製造業(3) 会社員(1)
31歳以上	4	3	7		
合計	8	5	13		

<第2・4・5回：地域支援ボランティア活動～独居老人宅訪問～>※人数は活動の総合計を記載

年齢	男性	女性	合計	地域	職業
20～30歳	5	0	5	三島市・沼津市・富士市 富士宮市・伊豆市・小山町	小学校教員(1)，高校講師(1) 自衛隊員(1)，地方公務員(2) 製造業(1)，会社員(4)
31歳以上	2	4	6		
合計	7	4	11		

(3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）
- ② 中央交流の家を利用した静岡県，神奈川県，東京都の企業に配付
- ③ 御殿場市，裾野市，小山町の従業員100名を超える企業に配付
- ④ 近隣市町村教育委員会，勤労青少年ホーム，勤労者福祉サービスセンターへの配付と直接訪問による参加依頼
- ⑤ 静岡県，神奈川県で活動している地域の青年会議所及び青年団連絡協議会への配付
- ⑥ 施設周辺の従業員数200名を超える企業に直接訪問による参加依頼
- ⑦ 静岡県，神奈川県，東京都にある地域のボランティア協会掲示板への掲載依頼
- ⑧ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼

3. 日程（例：第1回 「被災地支援ボランティア活動(南三陸町)」

14日 (土)	8:00	12:00	17:00	18:00	19:00	21:30
	交流の家 出発	出会いのゲーム (車中レク)	南三陸町内視察 宮城県立志津川自然の家着	夕食 入浴 休憩	ボランティア 講話・懇談会	
15日 (日)	8:00	12:00	16:30	18:00	19:00	21:30
	準備	南三陸町災害ボランティアセンター 南三陸町内での活動	移動	夕食 入浴 休憩	活動の 振り返り	
16日 (祝)	9:00	12:00	18:30			
	自然の家 出発	バス移動 ※途中，昼食・休憩	交流の家着 (解散)			

※以降の活動日程

- 第2回 平成24年9月29日(土)～30日(日)1泊2日 地域ボランティア活動
 第3回 平成24年10月6日(土)～8日(祝)2泊3日 被災地支援ボランティア活動
 第4回 平成24年12月15日(土)～16日(日)1泊2日 地域ボランティア活動
 第5回 平成25年2月25日(土)～26日(日)1泊2日 地域ボランティア活動

4. 内 容（活動の様子）

（1）「被災地支援ボランティア活動～南三陸町～」南三陸町災害ボランティアセンター

（第1回・3回）

【1日目：バス移動とボランティア活動についての講話・目標作り】

- ① 自分の仕事の休みの3連休を利用して、「被災地のために何かできることはないのか」とバスに乗り込んだ青年達は、初めて会う仲間との関係や被災地でのボランティア活動に対する不安でいっぱいだった。
- ② 9時間におよぶ長時間のバス移動中には、自己紹介、俳句ゲーム、DVD鑑賞、途中サービスエリアでの休憩ごとに席替えをすることで、初めて会う仲間との交流を図り、南三陸町に到着する頃には互いに自分自身のことを語り合うような関係を築けた。
- ③ 車中では明るい雰囲気青年達だったが、バスが南三陸町に入ると目の前に広がる光景に言葉を無くし、町の中心部であった場所でバスを降りると、倒壊した建物や傾いた巨大な堤防を実際に見て、あらためて震災の悲惨さを感じていた。
- ④ 青年達は「自分が復興の役に立てるのか」、「ほんの少しのことしかできないけれども、それでも意味があるのか」など、想像以上に大変な町の様子を見たことで、明日のボランティア活動に対しての不安が募り、意欲の低い状態であった。
- ⑤ 夕食の後には、南三陸町災害ボランティアセンターの職員から震災後のボランティア活動の様子、ボランティアセンターの役割と運営方法、災害ボランティア活動の意義についての話を聞いた。
- ⑤ 話を聞く前は、不安に満ちた表情の青年達だったが話を聞くうちに徐々に活動への勇気が湧いてきた。最後に、ボランティアセンター職員は「ガレキをバケツ一杯でも多く運ぶことが復興につながる」、「皆さんが運ばなければ前に進むことはない」という話しをした。青年達は、その言葉に感銘し口々に「一杯でも多く運ぶぞ、自分にできることを精一杯やるぞ」と活動への意欲を高めることができた。
- ⑥ 講話の後には、ボランティア活動に対する個人の目標を考え、一人ひとりが発表し合い、互いに共有することで、目標を達成するために全員で協力することへの意欲を駆り立てた。



【2日目：南三陸町内での瓦礫の撤去・キャンプ全体の振り返り】

- ① 朝8時30分、南三陸町災害ボランティアセンターで受付をすませる。センターには大型バスで来ている企業の人々など多くのボランティアが全国から集っていた。青年達はあらためてボランティアの必要性を感じ、活動への意欲を高めた。
- ② 瓦礫の撤去を行なう場所では、ボランティアセンターのリーダー・スタッフから、運んだ瓦礫の分別やケガをした時の対応などの注意があった。その中で「瓦礫の中から写真が出てきたときは捨てないで教えてください」との話しがあり、わずかな手掛かりでも探している遺族の気持ちを考えることができた。



③ 指示された範囲の瓦礫を撤去するにあたって、各自が勝手に行なうのではなく、作業手順を話し合いながら効率よく作業が進むように考えて行なった。

④ 一人では運べない大きな瓦礫を、あきらめずに何人かで力を合わせて運ぶことで、仲間と協力して活動することで得る達成感と一人ではできないことも仲間がいればできるという気持ちを持った。

⑤ 作業開始から3時間が過ぎ青年達に疲労が見え始めた時、「疲れたけど、自分達がやらなかったらこの場所は片付けられない。みんなで頑張ろう」と一人の青年が声を掛けた。この掛け声を機に、自分たちにできることを頑張ると言っていた青年達は、その後作業終了までお互いに声を掛け合って全ての瓦礫を運び続けた。

⑥ 作業の最後には交流の家スタッフが全員で横一列に並び、一步一步進みながら瓦礫を拾うように指示をし、最後まで全員で協力して活動を行なったことを意識させた。

⑦ 作業終了後、集めた瓦礫の大きな山を見た青年達は「バケツ一杯でも、多くの瓦礫を運ぶことができた」と互いに頑張ったことを讃え合い、スタッフリーダーからは「今日の皆さんの頑張りがこの町の復興に向けて大きな力となった」と感謝を伝えられたことで達成感と充実感を得た。



《南三陸町職員、小学校教員との交流・振り返り》

① 南三陸町職員や小学校教員から震災時の様子・震災後の町職員の仕事や小学校での児童との関わりなど実際の被災体験を聞いた。

② 活動後には振り返りの時間を設け、一人ひとりが体験を通して気づいたことや考えたことを発表し合うことで、自分の成長や変化を確認した。

(内容)

ア. 活動を通しての感想や目標に対する自分自身の考えをまとめる。

イ. 「一番印象に残ったことや言葉」を振り返ることで具体的な場面や物事に焦点化して考える。

ウ. 最後に、「明日からの生活で行動にうつすこと」をまとめる。

③ 青年達からは、「地元の人々の感謝の言葉で自分が役に立てたという喜びと自信が持てた」、「今までにない達成感と充実感を得た」、「自分が生かされていることに感謝し、自分にできることを精一杯やりたい」などの意見が出た。



【3日目：バス移動・まとめの一言】

① 青く綺麗に晴れ渡った空のもと、未だ瓦礫の山が多く残る南三陸町を後にする青年達の中には「また必ず仲間を連れて戻ってくる。そして、自分たちにもできる復興のための活動をする」と力強く訴える者もいた。

青年達にとってわずか3日間であったがボランティア活動への意欲を強く高めることが



できた。

- ② バスの中では、3 日間のまとめとして災害復興のボランティア活動から一夜明けて自分自身が考えることを発表し合った。「被災地の様子を実際に見て、ボランティア活動に取り組んだことで自分自身の考え方が変化していくのを感じた」、「今までは考えることがなかったが、自分が生活する地域で自分達ができることは何かということを考える機会となった」などの意見が出た。
- ③ 南三陸町での活動を通して、自分達の暮らす地域の現状に対しての問題意識を持つことができた。

(2)「地域支援ボランティア活動」(第2・4・5回)

《独居老人宅訪問ボランティア：大掃除等・片付け》

- ① 一人暮らしのお年寄りの自宅を訪問し、清掃や片付けを行ったり、話を聞いたりすることで、高齢者にとって日常の掃除が重労働であることや、地震をはじめ災害に対する不安を持っている人が多いことなどの高齢者の生活実態を理解した。
- ② お年寄りとの会話の中で、昔の人々の暮らしにあって、今はなくなってしまっている大切なことについて聞き、青年達は自身の生活をあらためて見直し、今後の人生観や生活の改善について考えた。
- ③ 「はじめは、ありがとう、と言われることに恥ずかしさを感じたが、次第に感謝されることで自分の中に強い責任感が芽生えてきたのを感じた」など、自分自身の変化に気付くことができた。
- ④ 窓ふきや部屋の片付けなどの掃除では、お年寄りとのコミュニケーションを図るために、全てを青年達がやるのではなく、お年寄りの指示を聞きながら一緒に協力して作業を行なうようにした。
- ⑤ お年寄りが話しを始めた時には、作業の手を止めて向き合い、うなずきを多く共感するしぐさで話を聞くことで、日頃、話すことの少ないお年寄りがたくさん話しをできるように心掛けた。
- ⑥ ボランティア活動の後は、夕食づくりを行った。参加者が自分達でメニューや役割分担を考えて、買い物から調理まで行なった。調理や食事をしながら、同世代の仲間と語り合うことで他人の考えを理解し、自分自身の価値観を再考する機会となった。
- ⑦ 独居老人が社会とのつながりを感じていられるように、一度、訪問した老人宅に、交流の家職員が度々様子を見に行き、ボランティア活動時だけの関係ではない社会とのつながりを感じられるようにした。



5. 評価

(1) 評価の方法

キャンプの内容や方法、運営面について、また、キャンプを通して考えたことなどを記述式と4段階評価によるアンケート調査を実施した。

(2) 結果

① アンケート集計（有効回答：34名）

ボランティアキャンプ全体の内容、運営面の総合評価では、34名中31名（91.2%）の参加者が「とても良かった」と回答した。

（4：とてもあてはまる 3：少しあてはまる 2：あまりあてはまらない 1：あてはまらない）

項目	4	3	2	1
被災した地域の人々や独居老人（高齢者）の「支援して欲しいこと」を考えるようになった	33 (97.1%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
身近な地域社会の現状や問題に関心を持つようになった	29 (85.3%)	5 (14.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
ボランティアは自分の成長に役立つと感じるようになった	30 (88.2%)	4 (11.8%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
自分自身に自信を持てるようになった	24 (70.1%)	9 (26.8%)	1 (2.9%)	0 (0.0%)
ボランティアキャンプを今後の生活に生かそうと思う	20 (74.1%)	6 (22.2%)	1 (3.7%)	0 (0.0%)

② 自由記述（抜粋）

- ・私たちは自分の生活する地域のことをもっと考えて、できることを精一杯やるのが大切だと気付いた。
- ・教員として子どもたちにこの経験を伝え、震災を風化させることなく自分達のこととして防災への関心を高めていけるように指導したい。
- ・地方公務員として自分で見たこと、聞いたこと、感じたことを職場の人や周りの人に伝え、一緒に考えていきたい。身近な地域でも多くの問題や支援の必要な人達がいるはずだと思う。
- ・仲間と一緒に一つの作業をすることで、お互いの動きを見て、気持ちを感じながらお互いを気遣う気持ちを持つことができた。
- ・お互いの目的を仲間と共有することの大切さを実感できた。
- ・本当に困っているお年寄りの手伝いをして、「ありがとう」と言われたのがとても嬉しかった。こんな自分でも役に立てることがあると思って自信がついた。
- ・一人暮らしのお年寄りと一緒に掃除をされていて、お年寄りが何を考えたり、何をしたいのか、考えてみたりするようになった。今まで考えたこともなかった。継続して実施することで、もっと多くのお年寄りの楽しそうな顔を見ることができたら嬉しい。

Ⅲ 事業の企画と運営

1. 企画のポイント

- ① 第1回・第3回は、南三陸町での震災復興ボランティア活動を通して、ボランティア活動への興味・関心や活動意欲を高めることとした。

その経験を基に、第2回・第4回・第5回では、御殿場市の独居老人宅でのボランティア活動を実施することで、身近な地域でのボランティア活動の必要性に目を向けさせた。

- ② 南三陸町に到着後は、町の中心部や湾岸部の被災状況を、バスを降りて実際に見学し、マスコミの報道ではなく自分の目で見てあらためて震災の悲惨さを考える時間とした。
- ③ 南三陸町での活動では、ボランティア活動をただ行なうのではなく、活動前には震災後のボランティア活動の様子や災害ボランティア活動の意義など、活動の意欲を駆り立てるため南三陸町災害ボランティアセンター職員から講話を聴く時間を設定した。
- ④ 活動後には、参加者全員の考えを共有する時間を設定し、何が問題か、何が必要とされているのかを考えた。
- ⑤ 南三陸町での活動を通して、目に見える大きな問題に取り組むことで地域活動に対する意識づけを行う。その後、身近な地域に目を向けることで高齢者の問題等、さまざまな問題が山積みしていることに気づき、地元地域での活動が必要とされていることに気づききっかけになると考えた。

2. 運営のポイント

- ① 南三陸町での活動では、初めて会う参加者同士の親密度を増すために以下の方法をとった。
 - ア. 事前にプロフィールを書いてもらい、しおりに掲載する。
 - ・その際、しおりに掲載すること、個人情報に関することは掲載しないことを伝える。
 - ・また、職業等の表記には注意を払う。
 - イ. キャンプネームを決める。
 - ・その際、初対面の方でも呼びやすいネームにすること。
 - ・決めたら、そのネームで呼ぶようにすること。そのために、スタッフが率先してキャンプネームで呼ぶこと。
 - ウ. バスレクとバスの座席を途中で替える。
 - ・最初は座りやすいように座席を指定する。
 - ・途中 SA で席替えをし、多くの方と話せるようにする。
- ② 被災地支援ボランティア活動では、南三陸町災害ボランティアセンターに団体登録をして、作業現場での指導と活動前の講話を依頼した。
- ③ 訪問する独居老人宅を探すために、社会福祉協議会や地域安全推進委員会の方に協力を依頼した。また、事前に独居老人宅に伺って打ち合わせる時にも、安心してもらうために日頃から交流のある地域安全推進委員会の方に同行していただいた。
- ④ キャンプの日程をあらかじめ地域安全推進委員会の方に伝えておき、委員の活動の際に独居老人宅でのボランティア活動を地域の独居老人の方に広報してもらうことで、ニーズが高まり新規の訪問先が増えていくようにした。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ① 第1回・第3回の被災地復興ボランティア活動では、日常生活では体験できない活動を通して、仲間とともにやり遂げ、感謝されることで得られる達成感や充実感が得られた。特に、活動後に互いの考えや想いを共有する時間を設定することで、互いを理解し協力することにつながり、より充実した達成感を得ることができた。
- ② 震災復興のボランティア活動を通して、地域社会の現状に関心を持ち、自分たちができることに目を向ける機会となった。
- ③ 独居老人宅ボランティア活動では、高齢者との関わりの中で身近な地域にある様々な問題について考え、地域の中で自分達が必要とされていることに気づくことができた。

(2) 課題

- ① 本プログラムは、被災地を支援するボランティア活動を行うことで、ボランティア活動への興味関心を高め、地域でのボランティアに目を向けさせることとしている。しかしながら、全国の施設等で被災地支援と同じような活動ができるとはいえないことから、ボランティア活動に興味・関心を抱くようなプログラムの検討が課題である。
- ② 被災地を支援するボランティア活動に参加した青年達が、地域でのボランティア活動に参加し、身近な地域での問題に関心を持つようにする手法の開発が課題である。
- ③ 参加者の確保が課題である。特に、地域でのボランティア活動の回が少ない。今年度は、市町の役所等や企業等を訪問する広報に努めた。この継続の他、別なチャンネルでの広報を工夫することが課題である。
- ④ 独居老人宅でのボランティア活動は、多くの地域が必要としていることであろう。中央交流の家での取組を契機とした全国的な運動に高めていくことが将来的な課題である。

担当：望月省吾，中村匡寛，小久保武